

研究紀要第 21 号

【研究主題】

学校と連携・協働した体験活動の在り方Ⅲ

～「生きる力」を育むための体験活動プログラムの工夫・改善～



はじめに

令和2年度から本研究主題にて「生きる力」を育むための調査研究に取り組んできました。主催事業「子供いきいき体験活動」における調査研究及び教科と関連付けた活動プログラムの開発を進め、「野外活動及び自然観察」「文化創作活動」「レクリエーション」の研修プログラムの中から教科と関連付けた活動プログラムとして、12 の指導案を開発し、学校との連携を模索してきました。

調査研究にあたっては、国立青少年教育振興機構が開発した「IKR 調査」を活用し、集団宿泊学習における「生きる力」の変容、成果と課題について検証してきました。その集大成として、本年度は小学校4校に調査研究協力校として御協力いただき、所員による事前指導から事後指導まで、学校職員との連携を図り、児童の変容について検証することができました。また、主催事業「悠遊学舎わくわくキャンプ」にて、これまで蓄積してきた「生きる力」の変容から課題を洗い出し、夏・冬ともに、同じ参加者で検証することとしました。事業のコンセプトや活動プログラムの組み立て、指導体制について充実を図りながら検証することができました。これまで、試行錯誤を繰り返しながらの調査研究の歩みとなりましたが、ここに研究紀要第 21 号としてまとめることができました。

結びになりますが、当所の調査研究を進めるにあたり御支援、御協力いただきました、関係の皆様から心から感謝を申し上げます。

令和7年3月

鹿児島県立青少年研修センター

I 研究の概要 P1

II 研究の実際 P3～P9

【仮説1】受入事業（集団宿泊学習）について

☆ 「生きる力」の変容は？（P3）

☆ 教科と関連付けた活動プログラム（指導案）に関連した質問項目の変容は？（P4）

☆ 集団宿泊学習を通して、あるがままの現実を素直に受け入れることや自分の意見や考えに自信をもつことに対する変容は？（P6）

【仮説2】主催事業（悠遊学舎わくわくキャンプ）について

☆ 「生きる力」の変容は？（P7）

☆ 各質問項目の変容は？（P8）

III 実践事例 P10～P26

受入事業（集団宿泊学習）

【実践事例1】鹿児島市立南方小学校（P10）

【実践事例2】鹿児島市立西伊敷小学校（P12）

【実践事例3】始良市立帖佐小学校（P14）

【実践事例4】鹿児島市立玉江小学校（P16）

主催事業（悠遊学舎わくわくキャンプ）

【実践事例】（P19）

IV 研究の成果と課題 P27



【悠遊学舎わくわくキャンプの様子】



I 研究の概要

学習指導要領

知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育む

- ・ 「何のために学ぶのか」という教科等を学ぶ意義を学ぶ
- ・ 資質・能力を三つの柱に整理し、教育課程全体を通して育成

当所のモットー

『やる気をおこそう
なせばなる
継続は力なり』

【体験活動】
・ 野外活動・自然観察
・ 文化創作活動
・ レクリエーション
豊かな心とたくましく
「生きる力」を育むための支援

県教育振興基本計画

【基本目標】

『夢や希望を実現し、ともに未来を創る鹿児島の人づくり』
～誰もが幸せや豊かさを感じられる地域や社会を目指して～

研究主題

学校と連携・協働した体験活動の在り方Ⅲ
～「生きる力」を育むための体験活動プログラムの工夫・改善～

研究の柱

青少年社会教育施設で行われる自然体験活動は、学校や家庭では得られない貴重な体験となる。実践的な体験活動は参加する児童生徒に新たな視点や技術を提供し、学びを促進すると考えられている。

そこで、当所での受入事業及び主催事業における体験活動を通じた学びによる「生きる力」の変容を検証する。

【受入事業（集団宿泊学習）】

- 児童生徒の「生きる力」を高めるための学校との連携・協働の在り方

【主催事業（悠遊学舎わくわくキャンプ）】

- IKR調査を生かした主催事業における体験活動プログラムの工夫・改善

研究の仮説

【仮説1】

受入事業（集団宿泊学習）において、教科と関連付けた活動プログラム（指導案）を活用し、体験活動プログラムの事前指導から事後にいたるまでの連携を図ることで、「生きる力」を育み高めることができるのではないか。

【仮説2】

主催事業（悠遊学舎わくわくキャンプ）において、蓄積してきたIKR調査の結果を生かし、体験活動プログラムへの転換を図ることで、「生きる力」を育み高めることができるのではないか。

研究の内容

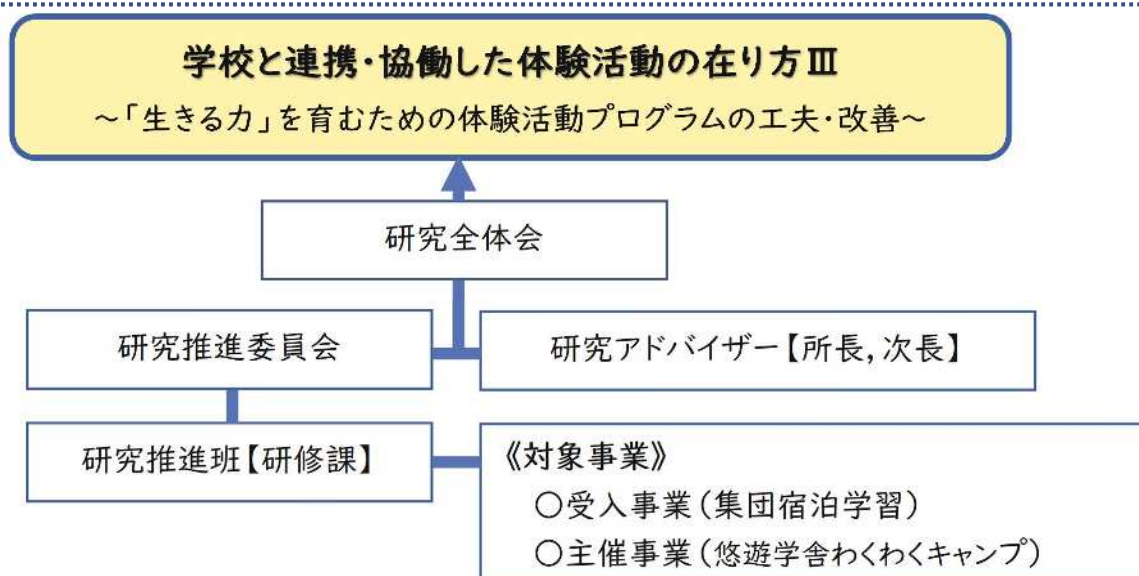
【受入事業（集団宿泊学習）】

集団宿泊学習の有用性について、教科と関連付けた活動プログラム（指導案）を活用し、IKR調査にて事前調査から事後調査、一か月後の追跡調査を実施することで、児童生徒の「生きる力」の変容を検証する。

【主催事業（悠遊学舎わくわくキャンプ）】

悠遊学舎わくわくキャンプについては、今年度サマーキャンプ（5泊6日）とウインターキャンプ（2泊3日）をシリーズ化した。そこで、年間を通して実施される本事業に対し、これまで蓄積してきたIKR調査結果及び体験活動プログラムの工夫・改善を図ることで、児童生徒の「生きる力」の変容を検証する。

【研究組織】



【研究の手立て】

《研究推進のための会議等》

- プロジェクト会議（毎月1回）
- 研究推進委員会（毎月1回, 臨時会議）

《受入事業（集団宿泊学習）調査研究協力校》

- 小学校4校
 - ・ 1泊2日（本館泊 2校）
 - ・ 2泊3日（キャンプ場泊 ⇒ 本館泊 2校）

〔教科と関連付けた活動プログラム（指導案）の活用〕

① 野外活動・自然観察

- 野外協力ゲーム（特別の教科 道徳）
- 野外炊事（家庭科）

② 文化創作活動

- ベニヤパズル（図画工作）

《主催事業（悠遊学舎わくわくキャンプ）》

- サマーキャンプ（7月23日から7月28日：5泊6日）
- ウインターキャンプ（12月25日から12月27日：2泊3日）

Ⅱ 研究の実際

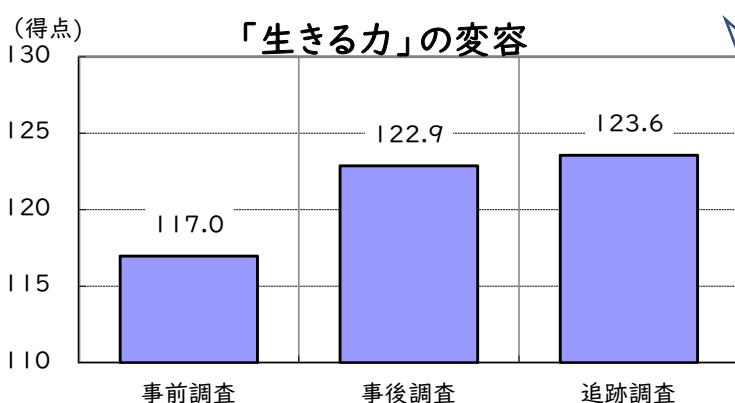
【仮説1】

受入事業（集団宿泊学習）において、教科と関連付けた活動プログラム（指導案）を活用し、体験活動プログラムの事前指導から事後にいたるまでの連携を図ることで、「生きる力」を育み高めることができるのではないかと。

〔調査研究協力校：4校 児童数合計：299人〕

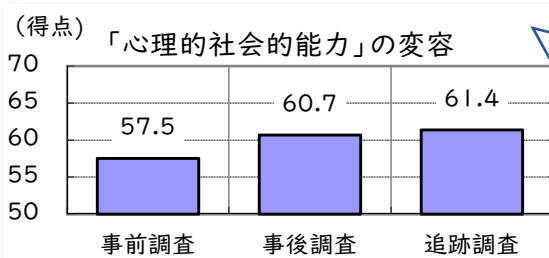
☆ 「生きる力」の変容は？

- ◆ 「生きる力」の変容について、事前から事後にかけて、5.9 ポイント向上し、有意差が見られた。事後から追跡にかけて、0.7 ポイント向上したが、有意差は見られなかった。事前から追跡にかけては、6.6 ポイント向上し、その向上に有意差が見られた。



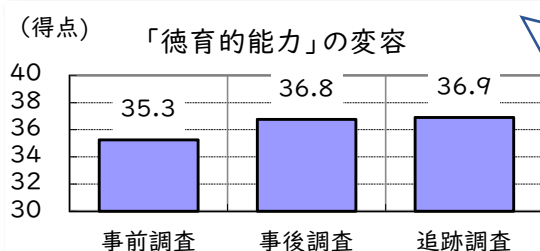
事前指導から集団宿泊学習における体験活動を通して「生きる力」が向上していた。終了後も学校職員による事後指導の充実と継続、児童も集団宿泊学習で学んだり体験したりした成功体験を通して、意識を高め、実践できていたことから追跡調査でも更に向上していた。

- ◆ 「心理的社会的能力」の変容について、事前から事後にかけて 3.2 ポイント向上し、有意差が見られた。事後から追跡にかけて、0.7 ポイント向上したが、有意差は見られなかった。事前から追跡にかけては、3.9 ポイント向上し、その向上に有意差が見られた。



事前学習及び実施時に、集団宿泊学習に対する目標の設定や確認、ルール等の確認をしたことにより、生活の中で生じる様々な課題等に対し、身に付けた知識等をもとに行動したり、対処したりすることのできる力が、事前調査から追跡調査にかけて向上していた。

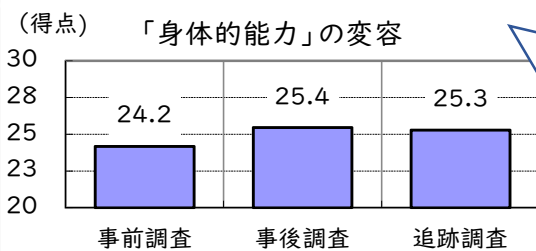
- ◆ 「徳育的能力」の変容について、事前から事後にかけて 1.5 ポイント向上し、有意差が見られた。事後から追跡にかけて、0.1 ポイント向上したが、有意差は見られなかった。事前から追跡にかけては、1.6 ポイント向上し、その向上に有意差が見られた。



事前学習及び実施時に、特に他者との関わりについて重点的に指導したことにより、人としての心情や道徳的な意識を養い自然や崇高なものとの関わり、集団や社会との関わりについて、主体的に関わろうとする力が、事前調査から追跡調査にかけて向上していた。

※「Ⅱ 研究の実際」に取り上げている項目は、全てIKR調査（P6 参照）に基づく

- ◆ 「身体的能力」の変容について、事前から事後にかけて 1.2 ポイント向上し、有意差が見られた。事後から追跡にかけて、0.1 ポイント低下し、有意差は見られなかった。事前から追跡にかけては、1.1 ポイント向上し、その向上に有意差が見られた。



事前学習にて活動プログラムの進め方やルールを指導し、実施時には安全指導の徹底を図ったことにより、身体を動かすために必要な基本的な身体的な能力、ストレスに耐えて生を維持し、健康に生きていくことのできる力が、事前調査から追跡調査にかけて向上していた。

☆ 教科と関連付けた活動プログラム(指導案)に関連した質問項目の変容は？

【教科と関連付けた活動プログラムのねらいと実施状況】

○ 野外協力ゲーム(特別の教科 道徳 : 調査対象校 4校)

〔ねらい〕

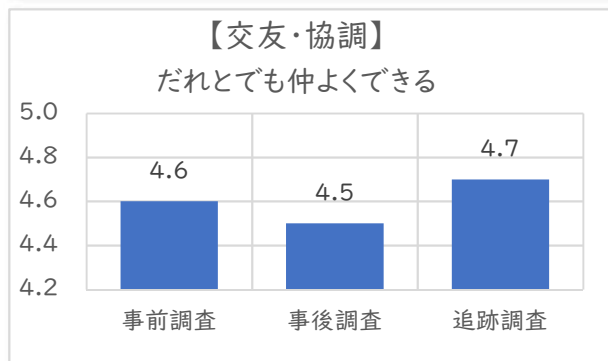
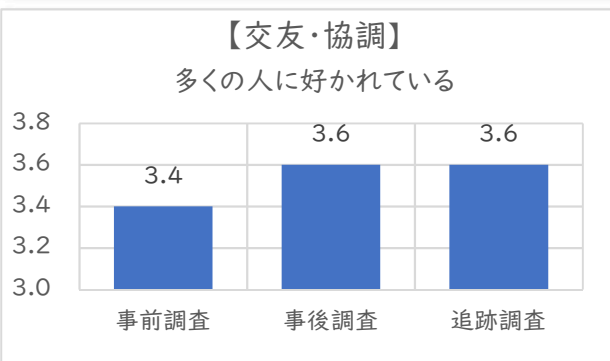
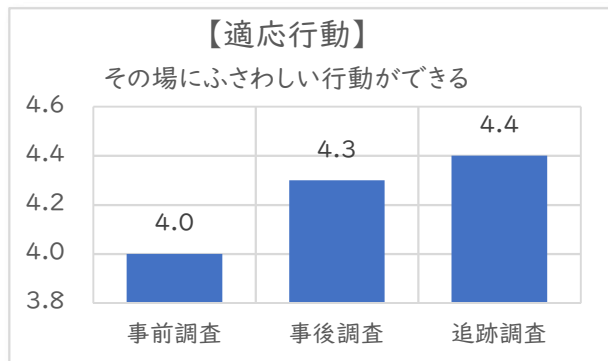
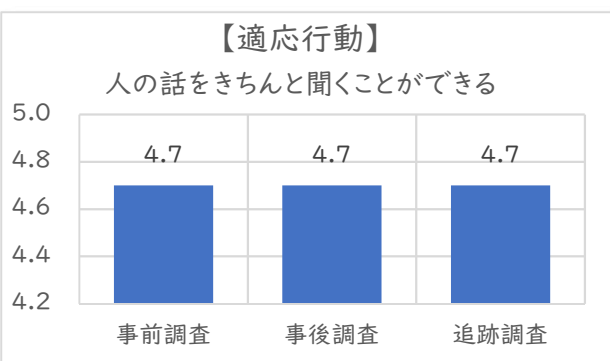
- ・ 友だちを正しく理解し、ともに活動することの喜びに気づき、進んで協力し、助け合おうとする態度を養う。
- ・ 友だち同士で互いに協力して学び合う活動を通して、お互いのよさを認め、支え合おうとする態度を養う。

○ 野外炊事(家庭科:調査対象校 2校)

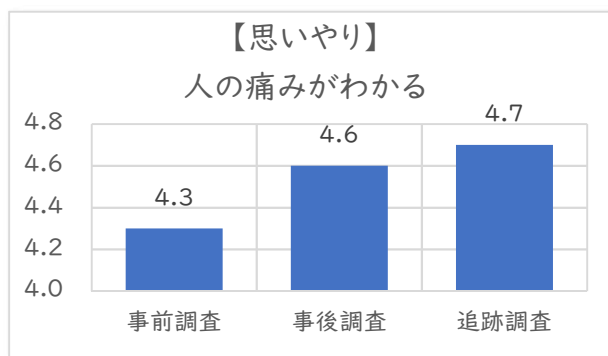
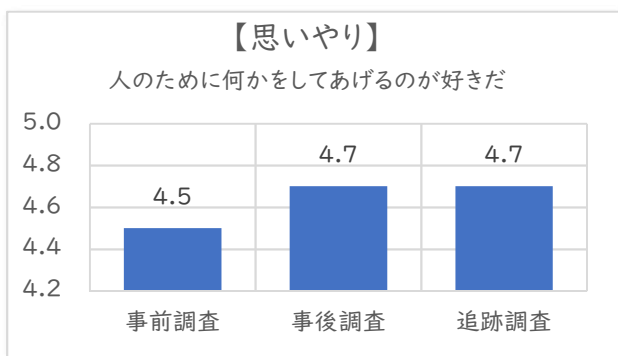
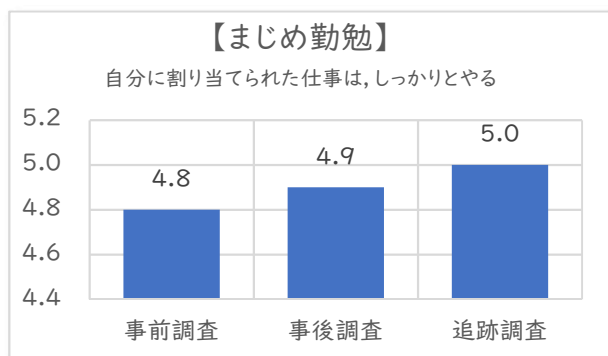
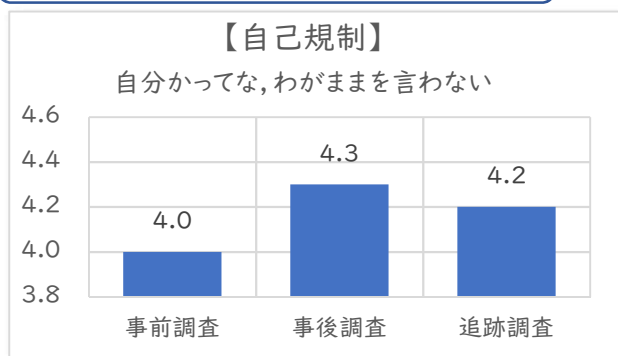
〔ねらい〕

- ・ 野外炊事を通して、火のおこし方や調理の仕方等について理解し、協力して食事を作る楽しさや食事のありがたさ、大切さに気付く。また、食生活について問題を見だし、よりよくしていこうと工夫することができる。

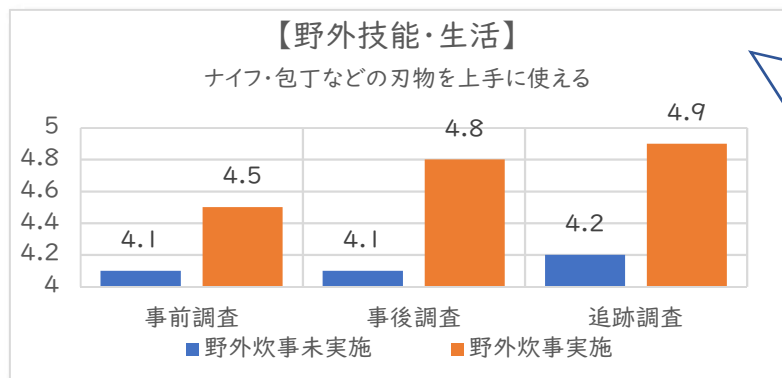
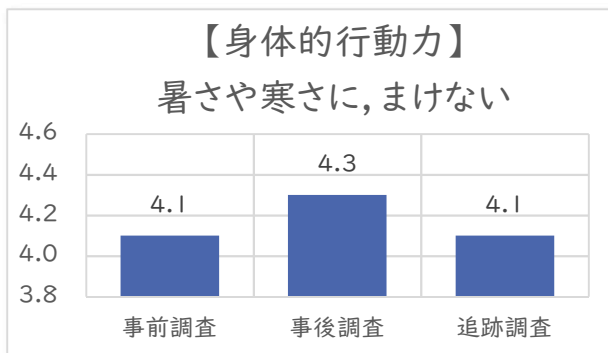
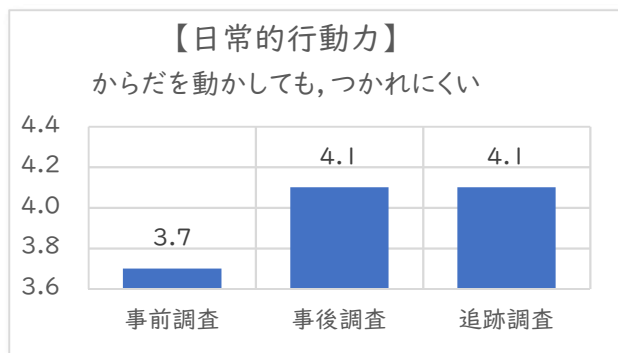
◆ 「心理的社会的能力」の変容



◆「徳育的能力」の変容

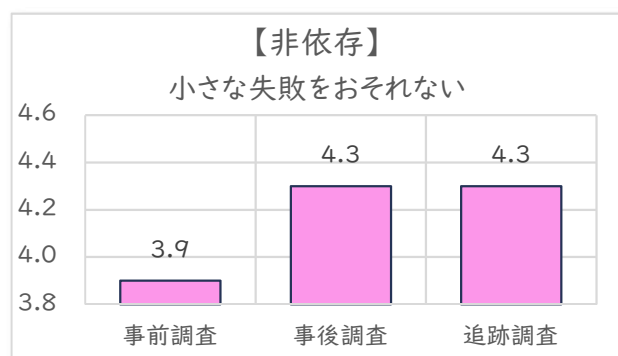
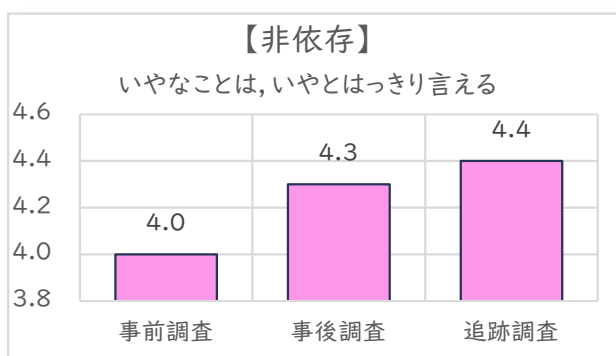
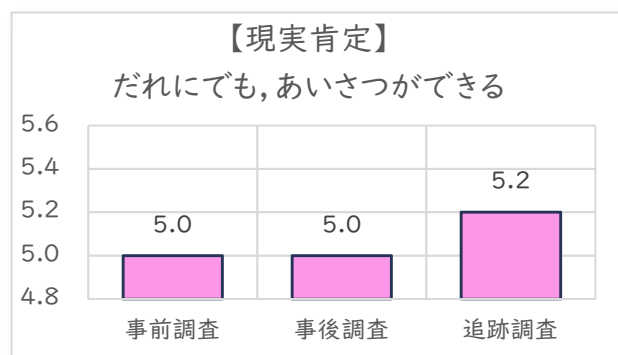
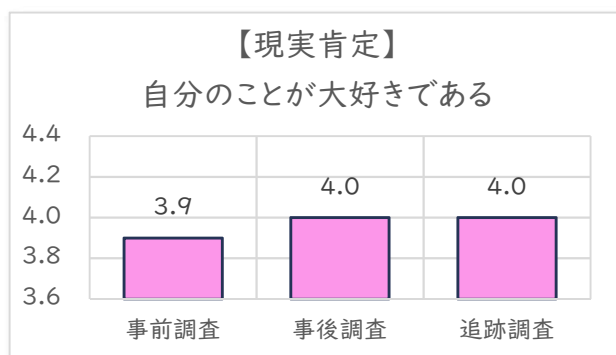


◆「身体的能力」の変容



2泊3日(キャンプ場泊
⇒本館泊)で実施した2
校については, 野外炊事
(カレー作り)を体験した
ことで, 調査結果に, 明ら
かな違いが見られた。

◇ 集団宿泊学習を通して、あるがままの現実を素直に受け入れることや自分の意見や考えに自信をもつことに対する変容は？



集団宿泊学習において、事前打合せを行い、その中で、学校の集団宿泊学習に対するねらいを確認し、教科と関連付けた活動プログラムのねらいとの共通点から、所員が学校に出向き、事前学習を実施した。児童、引率者、所員の三者が同じねらいを共有したことにより、集団宿泊学習におけるプログラム活動まで一貫した指導・支援ができ、「生きる力」の向上につながった。

また、事後学習についても、各学校で、児童に活動を通して学んだことを振り返る活動を位置付けたことで、今後の生活において、自分や他者のよさを大事にしたり、困難なことにも挑戦する気持ちをもったりするなど、思いやり、挑戦心といった意識や意欲が持続していたことが分かった。非認知能力に関するアンケート項目については、一定の成果はあったものの、本調査研究においては重点的に検証できていないため、今後、研究の方向性を含めて検討しながら、調査研究を推進していく必要がある。

IKR調査(簡易版)
とは？

28 項目の質問(6段階評価)から、「心理的社会的能力」・「徳育的能力」・「身体的能力」の3つの能力で「生きる力」を数値化し、測定・分析するものである。質問は、「いやなことは、はっきり言える」といった心理的社会的能力(14 項目)、「自分かってな、わがままを言わない」といった徳育的能力(8項目)、「早寝早起きである」といった身体的能力(6項目)の3つの能力で構成されている。回答は、質問項目ごとに「とてもよくあてはまる」から「まったくあてはまらない」の6段階(数字6～1)に○印を付ける。

(事前・事後調査:集団宿泊学習実施前後、追跡調査:実施一か月後)

※独立行政法人 国立青少年教育振興機構「事業評価に使える『生きる力』の測定・分析ツール」(H22・5)

【仮説2】

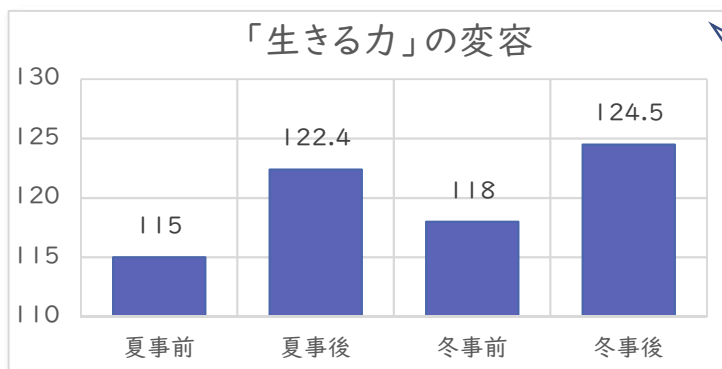
主催事業（悠遊学舎わくわくキャンプ）において、蓄積してきたIKR調査の結果を生かし、体験活動プログラムへの転換を図ることで、「生きる力」を育み高めることができるのではないか。

サマーキャンプ：7月 23 日から 28 日まで 5泊6日

ウインターキャンプ：12月 25 日から 27 日まで 2泊3日

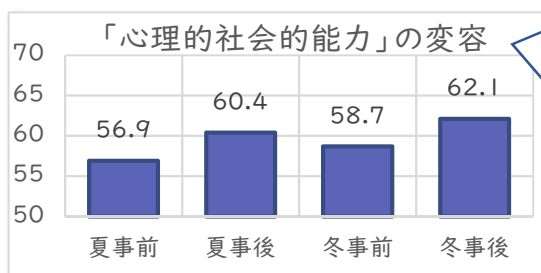
☆ 「生きる力」の変容は？

- ◆ 「生きる力」の変容について、サマーキャンプ事前から事後にかけて、7.4 ポイント向上し、ウインターキャンプ事前から事後にかけては、6.5 ポイント向上した。事業を通しての事前から事後にかけては、9.5 ポイント向上していた。



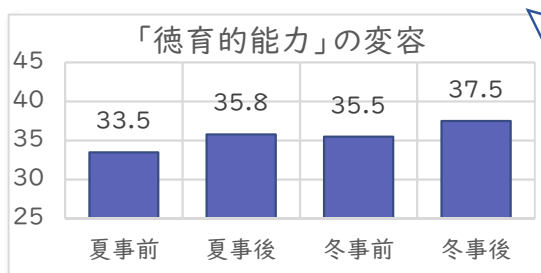
特に、夏から約5か月後に実施した冬の調査においては、わくわくキャンプでの様々な体験活動を通して、夏より数値結果が大きく向上していた。

- ◆ 「心理的社会的能力」の変容については、サマーキャンプ事前から事後にかけて 3.5 ポイント向上し、ウインターキャンプ事前から事後にかけて、3.4 ポイント向上した。事業を通しての事前から事後にかけては、5.2 ポイント向上していた。



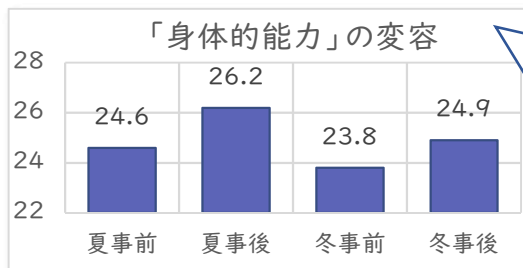
人間関係づくりを意識した体験活動プログラムを意図的に組み立てたことで、参加者同士で協議を重ね、相互理解ができた。また、自然体験活動を通して、自分にもできることが増え、できることが増えたことで、自信をもち、参加者や所員の称賛もあり、事前調査から事後調査にかけて向上していた。

- ◆ 「徳育的能力」の変容については、サマーキャンプ事前から事後にかけて 2.3 ポイント向上し、ウインターキャンプ事前から事後にかけて、2ポイント向上した。事業を通しての事前から事後にかけては、4ポイント向上していた。



様々な活動の場面で、参加者同士の協議を重ね、より効率的に、満足するためにはどうしたらよいかを考えながら活動することができた。また、自分本位な気持ちが多かった参加者も、長期的な宿泊体験活動を通して、折り合いを付けたり、我慢したりすることができるようになったことで、事前調査から事後調査にかけて向上していた。

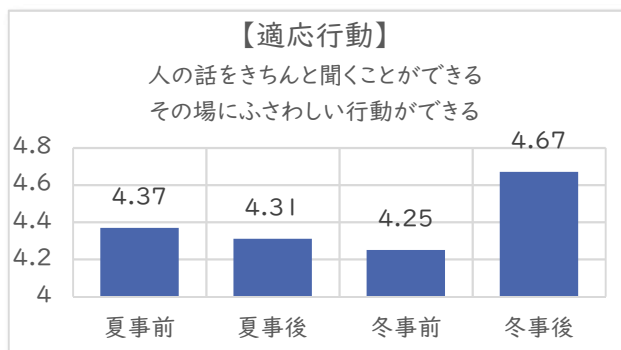
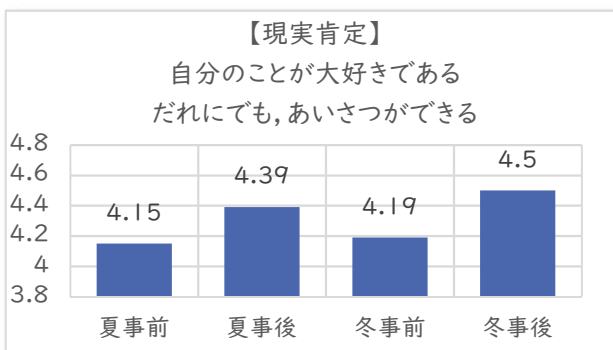
- ◆ 「身体的能力」の変容については、サマーキャンプ事前から事後にかけて 1.6 ポイント向上し、ウインターキャンプ事前から事後にかけて、1.1 ポイント向上した。事業を通しての事前から事後にかけては、0.3 ポイント向上していた。



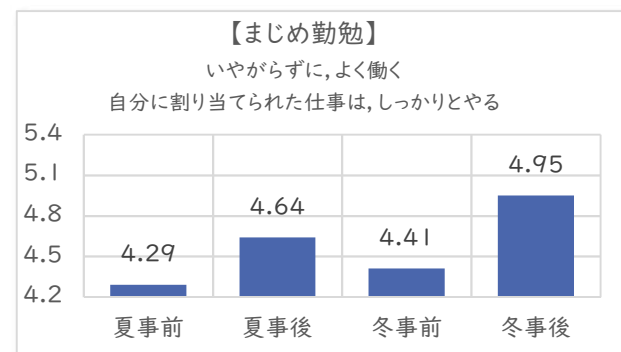
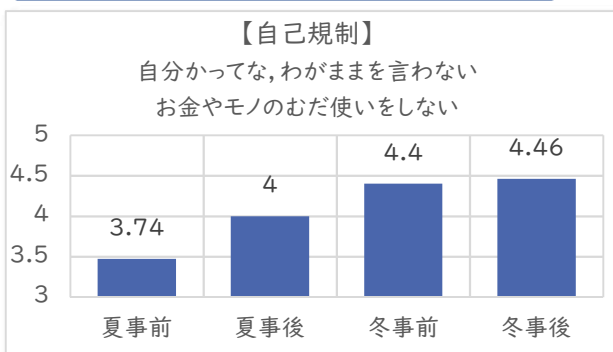
徒歩での長距離移動を伴う体験活動プログラムを組み立てたことで、身体的な負荷をかけたが、全員完歩することができた。一方で、野外炊事等のプログラムを数回組み立てたが、野外技能・生活の向上を図るプログラムを通して、その向上につなげることができなかった。

☆ 各質問項目の変容は？

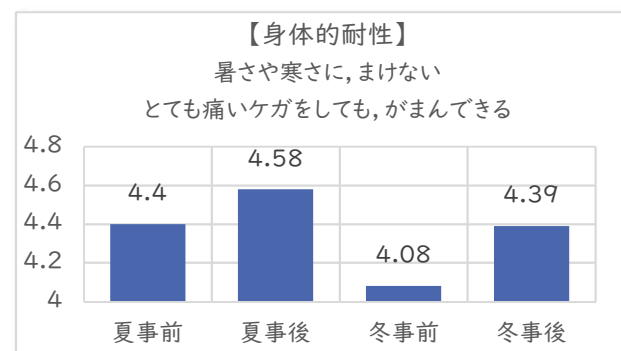
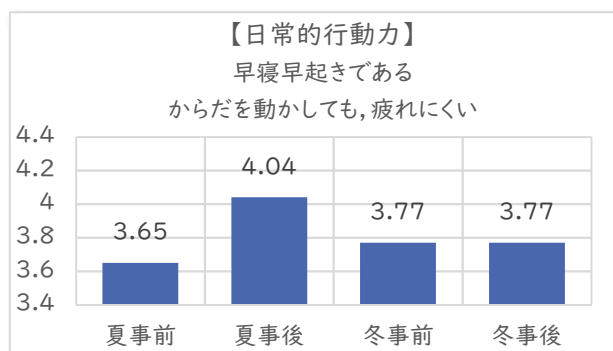
◆ 「心理的社会的能力」の変容



◆ 「徳育的能力」の変容



◆ 「身体的能力」の変容



昨年度の本事業は、「生きる力」を高めるため、異年齢集団活動において、協働することの良さに気付くことのできる姿を設定し、様々な自然体験活動にチャレンジし、体験を通して自己の成長を感じ、自己肯定感を高めるための活動プログラムを組み立てた。サマーキャンプ、ウインターキャンプのいずれにも参加した児童生徒は4人であり、ウインターキャンプ時には、コミュニケーションや協力する姿など、成長した姿がうかがえたため、今年度2つの事業をシリーズ化し、年間を通して検証することとした。

今年度は、「やればできる自分」「絆を深める」「自分にもできるSDGs」の3つのテーマを意識して、活動プログラムを設定した。長期間に渡り事業を展開することから、参加者個人が自分にもできることを増やすことで、自己肯定感の高まりや、長期間一緒に活動することから絆を固いものにすることで協調性をより育むことを目指して、活動プログラムを組み立てた。

具体的には、白銀坂遠行や吉田ハイキングで、最後までやり遂げる忍耐や身体的耐性が向上した。自分たちで企画立案した「あったか鍋作り」では、買い出しから調理、片付けまでやり遂げることで達成感だけでなく、主体性が高まり、「やればできる自分」に気付き、「絆を深める」ことができたことで、自己有用感、自己肯定感の向上につながった。

「悠遊学舎わくわくキャンプ」活動の様子



【Instagram】

Ⅲ 実践事例

【実践事例Ⅰ】 鹿児島市立南方小学校 小学5年 1泊2日 本館泊
《活動プログラム:野外活動及び自然観察「野外協力ゲーム」》
特別の教科 道徳「相互理解,寛容(協力することの大切さ)」

事前打合せ【9月12日(木):学年会】

【打合せ内容】

- 集団宿泊学習のねらい確認
- 調査研究のねらい説明
- 事前指導展開案の確認
- 児童の実態,学校の要望確認

【ポイント!】

- 集団宿泊学習のねらいと,当センターのねらいが合致していることを説明し,助け合い,協力を本活動の重点とすることを確認した。
- 生活場面での協力が必要な部分について紹介してほしいと学校から要望があった。

事前指導【9月18日(水):2校時】

過程	活動の内容	指導上の留意点等	活動の様子・児童の反応
導入 (10)	1 グループワーク (究極の選択)を行う。	○ 当日と同じグループ編成にすることで,相互理解を深めようとする気持ちを高める。 ○ グループワーク[写真1]を行うことで,人それぞれ考えていることが異なることに気付かせる。	 【写真1 グループワークの様子】
展開 (25)	2 めあてを確認する。 友達と協力して生活するためには,どのようなことが大切なのだろうか。 3 活動プログラムの内容を知る。 ○野外協力ゲーム	発 集団宿泊学習の中で,同じように友達と考えが違ふ場面がでてきたらどうしますか。 ○ 活動プログラムの内容を紹介したり,実際に体験したりすることで,集団宿泊学習に対する見通しをもたせる。 【野外協力ゲーム】 ① 活動の紹介 ② UFOの実演[写真2]	協力することは大切だと分かっているけど,実際には難しいことが多いということを実演から学んでいた。  【写真2 UFO実演の様子】
終末 (10)	4 生活場面での協力について知る。 5 疑問や不安を解消する。 6 まとめを行う。	○ 質問応答の時間を設定することで,児童の不安を解消する。 ○ めあてに対する自分なりの考えをもたせることで,道徳的価値の高まりを図る。	多くの質問があり,回答を受けて安心している様子が伝わってきた。 児 自分の主張ばかりしないで,相手に合わせることも大切だと思った。

事前指導から当日までに

- 事前指導を受けて学習したことをもとに、集団宿泊学習での目標を立てる。
- 特別の教科道徳において協力が徳目となっている内容を取り扱う。

集団宿泊学習【9月25日(水)～26日(木)】

〔野外協力ゲーム〕

- 安全指導
- 活動内容の確認[写真3]
- 活動の実際
- 振り返り



【写真3 活動目的確認の様子】



【写真4 課題解決をする様子】

〔活動の実際〕

- 事前学習での学びを生かしながら、積極的に声を掛け合う姿が見られた。
- 移動の際に遅れそうな児童がいた際にはその児童に合わせて移動するなど、グループ全員で活動を楽しむことができた。
- 身長の高低や運動の得意不得意など、お互いのことをよく見つめ、一人一人の特徴に合った役割分担を行っていた。[写真4]

〔児童の振り返り〕

- ・ 協力をしないとうまくいかないということがよく分かった。なぜなら、みんなと考えも違うし、動きも違うと課題が難しく感じたから。
- ・ 相手がどう思うかを考えて言うことで、仲よく活動することができた。
- ・ 友達とたくさん話し合うことで、課題をクリアすることができた。

事後学習【9月30日(月)】

※ 活動の振り返りを作文にまとめることで、事後学習とした。



引率者の感想や児童の変容

- 児童から、課題解決に向けた新しい考えがたくさん出ていて驚いた。
- 5・6年合同での実施であったが、普段は単学級のため、とてもよい交流の時間となった。
- あいさつを、元気よくすることができるようになった。
- 朝のグリーントimeなど、積極的に動くことが多くなり、他の職員からも「いい変化があったね。」と褒められていた。

児童の感想

私の思い出に残っていることは、野外協力ゲームである。理由は、野外協力ゲームで学んだことがあったから。それは、お互いの意見に納得して協力し合うことだった。そのおかげで、野外協力ゲームも早くクリアできて、達成感があった。

これからもお互いの意見を大切にして協力していきたいと思う。

【実践事例2】 鹿児島市立西伊敷小学校 小学5年 2泊3日 キャンプ場泊→本館泊
 《活動プログラム:野外活動及び自然観察「野外協力ゲーム」》
 特別の教科 道徳 「相互理解,寛容(協力することの大切さ)」

事前打合せ【9月12日(木):学年会】

【打合せ内容】

- 調査研究のねらい説明
- 集団宿泊学習のねらい確認
- 事前授業についての打合せ
- 児童の実態,学校の要望確認

【ポイント!】

- 集団宿泊学習の事前学習において,児童に問題意識や課題意識をもたせることで,集団宿泊学習で課題意識をもちながら,主体的に活動し実践しようとする態度につなげられるように共通理解を図った。

【イメージの共有化】

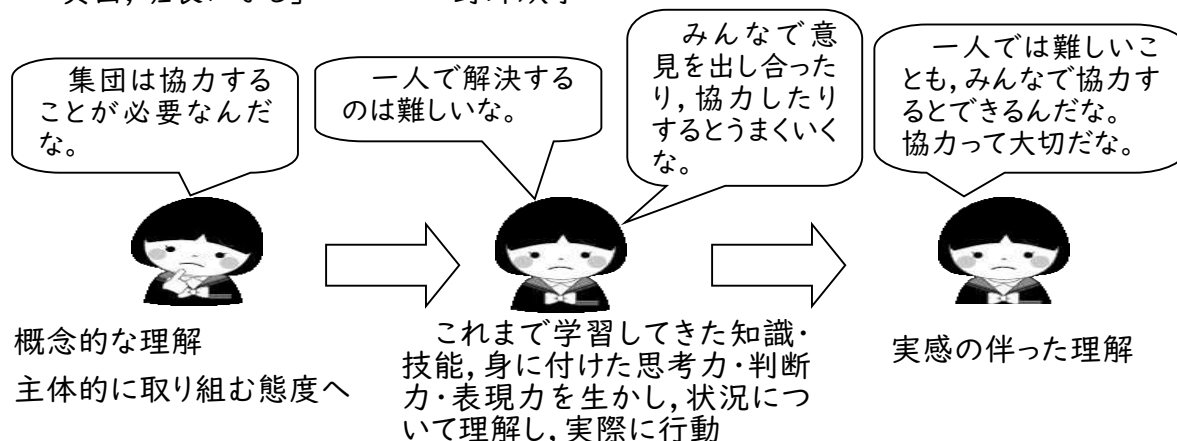
【事前授業:学校】

特別の教科 道徳
 「真由,班長になる」

【宿泊学習:センター】

野外協力ゲーム
 野外炊事

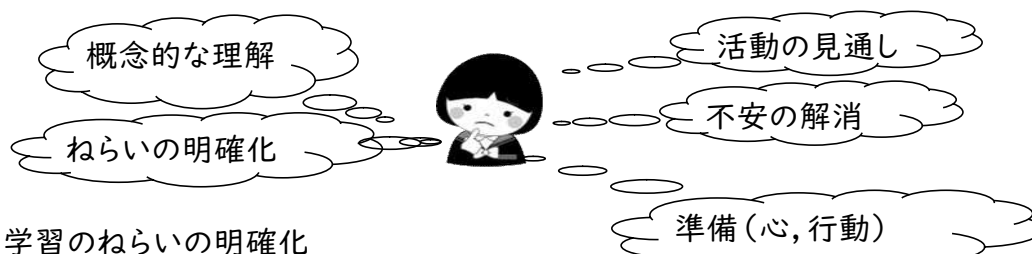
【事後学習:学校】



事前指導【10月9日(水):6校時】

【ねらい】主体的に取り組む態度へつなげる。

- ・ 集団宿泊学習のねらいの明確化
- ・ 活動プログラム紹介
- ・ グループワークトレーニングの実施
- ・ 集団宿泊学習についての質問



集団宿泊学習のねらいの明確化

「協力・助け合い」「自然の中で過ごすこと」「進んで取り組むこと」を大切にしながら集団宿泊学習に臨むことを確認した。また,道徳科の「真由,班長になる」の学習で,どのような考えをもったかについても振り返り,その気付きを集団宿泊学習につなげていくことを確認した。

活動プログラム紹介・グループワークトレーニングの実施

集団宿泊学習で体験する活動プログラムを紹介し、活動の見通しがもてるようにした。また、グループワークトレーニングを実施し、グループで協力するためには、どのような考えや行動が必要かを考えさせ、集団宿泊学習での主体的な実践につなげられるようにした。

【児童の感想】

- ・ 協力するのに必要なのは、自分の考えだけを言うのではなく、友だちの意見も取り入れることだと思った。でも、意見が割れる時もあり、協力するのは難しいときもあると感じた。
- ・ 一人で何かをするより、友達と協力した方が解決したときうれしいし、おもしろいと思った。

集団宿泊学習についての質問

スライドで実際に泊まる部屋や食堂、キャンプ場の様子を写真で紹介したり、実際のテントを建てたりすることで、具体的に集団宿泊学習についてのイメージをもてるようにした。また質問を受け付け、集団宿泊学習に対する不安を解消できるようにした。

集団宿泊学習【10月22日(火)～10月24日(木)】

【ねらい】今まで身に付けてきた知識・技能を生かし実践する。



野外協力ゲームでは、互いに意見を出し合い、協力して課題を達成しようとする姿が見られた。

野外炊事においても、与えられた役割をしっかりとこなし、おいしいカレーを作り上げた。

【児童の感想】

みんながいろいろと意見を言ってくれたので、最初は無理かもと思っていたけど、解決できるものがあつた。達成できてよかった。(野外協力ゲーム)

事後学習(各学級で実施)

【ねらい】 集団宿泊学習で実践したことを振り返り、実感の伴った理解につなげることにより、「生きる力」へとつなげていく。

引率者の感想や児童の変容

学校生活に戻ってからは以前と比べ、時間を守る意識が高まった。また、集団宿泊学習でいろんなグループでの活動を行ったことにより、これまであまり関わってこなかった友達との交流が深まる場面が見られるようになった。

児童の感想

- 私が気付いたことは、友達と協力すれば、一人ではできないことが出来るようになることだった。野外協力ゲームでは、ルールを決めた。そのルールは「いらいらしない。」というルール。すると誰かがミスをした時「大丈夫だよ。」などの声かけができるようになった。
- 1日目はカレーを作ったり、テントを立てたり、一人じゃできないことをたくさんした。友達との助け合い、協力のおかげでとてもおいしいカレーが作れたり、とても丈夫なテントをたてたりすることができた。一人ではできなくても、友達と協力すれば、あっという間に自分たちでいろいろできた。

【実践例3】 始良市立帖佐小学校 小学5年 2泊3日 キャンプ場泊 ⇒ 本館泊

《活動プログラム:野外活動及び自然観察「野外炊事」》

家庭科 「家庭の生活発見, 食べて元気に, できるよ 家庭の仕事」

《活動プログラム:文化創作活動「ベニヤパズル」》

図画工作科 「系のこの寄り道散歩」

事前打合せ【10月25日(金):学年会】

【打合せ内容】

- 集団宿泊学習のねらい確認
- 調査研究のねらい説明
- 事前指導展開案の確認
- 児童の実態, 学校の要望確認

【ポイント!】

- 集団宿泊学習のねらいから, 助け合い, 協力を本活動の重点とすることを確認した。
- 野外炊事, ベニヤパズルの進め方について確認した。
- 「ルールを守る」ことの大切さを伝えてほしいと学校から要望があった。

事前指導【11月1日(金):5校時】

過程	活動の内容	指導上の留意点等	活動の様子・児童の反応
導入 (10)	1 集団宿泊学習のねらいを確認する。 2 UFO をする。[写真1]	○ 当日と同じグループ編成にすることで, 相互理解を深めようとする気持ちを高める。 ○ 期間中に野外協力ゲームも設定されているため, 活動の一部を実演することで, めあての焦点化を図る。	 【写真1 UFO 実演の様子】
展開 (25)	3 めあてを確認する。 友達と協力して生活するためには, どのようなことが大切なのだろうか。 4 活動プログラムの内容を知る。 ○ 野外炊事 5 センターの紹介やきまりを知る。 ・施設の紹介 ・3つの管理 ・ルールを守る(3つのきまり)	発 集団宿泊学習の中で, 同じように友達と考えが違う場面がでてきたらどうしますか。 ○ 活動プログラムに合わせた場面を紹介することで, 見通しをもたせる。 【野外炊事】 ① 野外炊事の役割分担 ② 係での連携, 協力 ③ 野外炊事で気を付けること ○ 複数校が利用する期間であるため, 施設のきまりを確認することで, お互いが気持ちよく過ごすために必要なことを気付かせる。	おいしいカレーを作るために, 助け合いや協力, 連携を大切にしていこうという気持ちの高まりが見られた。 関 僕らかまど係が準備しておくからいつでも持ってきて大丈夫だよ。 センターでのきまりを知り, 家庭でも練習しておこうという声が多く聞かれた。 関 研修センターのことや活動の中身が分かって, 宿泊学習がもっと楽しみになりました。
終末 (10)	6 疑問や不安を解消する。[写真2] 7 まとめと次時の学習を知る。	○ 質問応答の時間を設定することで, 児童の不安を解消する。 ○ 6校時にベニヤパズルの下書きを設定することで, 作り方を指導する。 【ベニヤパズル】 ① ベニヤパズルの作り方を理解 ② 作り方の様子の紹介	 【写真2 質疑応答の様子】

集団宿泊学習【11月12日(火)～14日(木)】

〔野外炊事〕

- 安全指導
- 役割分担と係ごとの活動確認
- 係間の連携
- 振り返り



【写真3 野外炊事の様子】



【写真4 食事の様子】

〔活動の実際〕

- 事前学習を振り返りながら、協力、連携することの大切さを再確認することができた。
- 3つの係(食材, 食器, かまど)それぞれが、活動内容と果たすべき役割を理解し、スムーズに活動することができた。[写真3・4]

〔児童の振り返り〕

- ・ 係の仕事が終わって手伝いをしてくれる人がいた。
- ・ 協力にもたくさんの方があると分かった。
- ・ 次のことを考えながら行動すると、他の役割の人とのタイミングもばっちり、スムーズにいくことが分かった。

〔ベニヤパズル〕

- 安全指導
- 活動の流れの確認
(彩色, 切断, 仕上げ等)
- 振り返り



【写真5 ベニヤパズル制作の様子①】



【写真6 ベニヤパズル制作の様子②】

〔活動の実際〕

- 事前学習で学んだことをもとに、下絵や切り取り線を記入することができ、スムーズに活動を終えることができた。
- 電動系のこを初めて使う児童が多かったが、安全指導をしっかり聞き、慎重に作業していた。[写真5・6]

〔児童の振り返り〕

- ・ 電動系のこを初めて使った。うまく動かすことができて上手に完成することができた。
- ・ 木を切るのは難しかったが、色を塗るのがとても楽しかった。

引率者の感想や児童の変容

- 不登校傾向にあった児童が、集団宿泊学習に向けて自分の役割に一生懸命取り組んだり、終了後も毎日登校し友だちと過ごしたりすることができている。
- 移動教室や授業前の着席など、時計を見て周りの人に声かけをする児童が増えた。

児童の感想

テントを正確に立てることや、カレーをおいしく作るためには、協力がとても大切だということが分かった。僕は、この集団宿泊学習で、新しいことに色々チャレンジすることができた。普段やったことのないことにチャレンジしてみると、とても楽しかった。

【実践事例4】 鹿児島市立玉江小学校 小学5年 1泊2日 本館
《活動プログラム:野外活動及び自然観察「野外協力ゲーム」》
特別の教科 道徳「相互理解、寛容(協力することの大切さ)」

事前打合せ【10月9日(水):学年会】

〔打合せ内容〕

- 学校が立てたねらいの確認
- 流れの説明
- 児童の実態把握

〔ポイント!〕

事前に保護者に説明していることやオリエンテーションのDVDを視聴していることから、センターの調査研究の流れに即して実施してほしいということで、野外協力ゲームに特化して事前指導を確認した。

事前指導(全体指導)【10月18日(金):1校時】

過程	活動の内容	指導上の留意点等
導入 (10)	1 本時のめあてを立てる。 集団宿泊学習に向けて、 めあてを立てよう。	○ 当日と同じグループ編成にすることで、相互理解を深めようとする気持ちを高める。[写真1] 「みんなで協力する。」「時間を守る。」「自然を楽しむ。」といっためあてがみられた。
	2 集団宿泊学習のねらいを確認し、自分のめあてを立てる。[写真2]	○ 自分なりに集団宿泊学習のめあてを立てることで、学習の見通しをもたせる。
展開 (25)	3 集団宿泊学習での活動の見通しをもつ。 (1) 野外協力ゲームについて知る。	○ 玉江小学校の活動プログラムに合わせた場面を紹介することで、集団宿泊学習に対する見通しをもたせる。 [野外協力ゲーム] ① 活動の紹介 ② UFO の実際 [写真3] 成功するグループからは、「目線をそろえる。」「始めは水平から始める。」などのアドバイスが出された。
	(2) 集団宿泊学習までにしておくことを確認する。	○ 自分の持ち物の整理整頓、布団の片付けは、集団宿泊学習までに家で実践するように伝える。
終末 (10)	4 次時の予告をする。	○ 次の時間に道徳の学習を行い、友達が失敗したり、グループで意見が食い違ったりしたときに、どんな行動や言動をしたいか考えさせる。



【写真1 話し合いの様子】



【写真2 自分のめあて】



【写真3 UFO体験の様子】



事前指導(各学級:道徳)【10月18日(金):2校時】

過程	活動の内容	指導上の留意点等
導入	1 前時の前時のUFOの体験を振り返る。 [写真4]	○ 前時のUFOの体験でどんな思いをしたかを確認する。失敗した場面ではみんなはどんな気持ちだったかを考えさせた。 前時に実施したUFOの体験では、「うまくいかないでイライラした。」「うまくできていない人を強く責めてしまった。」「攻められていやな気持ちになった。」という感想が聞かれた。

展開	2 教材「折れたタワー」を読む。[写真5]	○ 教材の中で出てくるひろしとのりおの二人の心情を考える。 教材を読んでいき、児童は責められるひろしの気持ちを考えることができていた。自分が忘れたときにのりおから強く責められたひろしであったが、自分の作品をのりおにこわされたとき、ゆるしてくれた。なぜなのかを児童なりに考えることができていた。 ☆キーワード→「広い心」「お互いさま」
終末	3 集団宿泊学習で生かせることを考える。[写真6]	集団宿泊学習で、もし同じ場面があったときにどうするのかを児童が協議をして考えることができた。



【写真4 UF0 体験振り返りの様子】



【写真5 本時の板書】



【写真6 めあて話合いの様子】

集団宿泊学習本番「野外協力ゲーム」10月23日(水)～24日(木)

- 野外協力ゲームのねらい確認
- 事前指導の振り返り
- 安全指導 ○ 振り返り [写真9]

- ※ 野外協力ゲームのねらいを再確認した。[写真7]
- ※ 10月28日の事前指導や道徳の授業を振り返って流れを確認した。
- ※ 事前指導を生かして、前向きに活動することができた。[写真8]



【写真7 話合いの様子】



【写真8 課題解決の様子】



【写真9 振り返りの様子】

《児童の反応》

- 事前指導を振り返ったところ、しっかりねらいを把握していた。グループでの協議においても前向きに確認できていた。
- 活動中には、課題をクリアするためにまず話し合い、どうしたらクリアできるか試行錯誤していた。難しい活動も根気強く取り組んでいた。
- 「みんなで前向きに話し合ってきた。」「楽しく活動ができた。」「怖い活動も友達の励ましてチャレンジすることができた。」

事後指導(学級活動)【10月28日(月):2校時】

- 集団宿泊学習を振り返って
- 今後の学校生活で生かすこと
- 最高学年になるためには？

- ※ スライドを通して、集団宿泊学習を振り返った。
- ※ 野外協力ゲームで、学んだことを児童同士で出した。→キーワード「信頼」「助け合い」「チャレンジ」
- ※ 難しい課題に対して、グループの仲間の思いを受け止め、前向きに話し合うことで、クリアすることができた。[写真10・11・12]



【写真10 話し合いの様子】



【写真11 振り返りの様子】



【写真12 本時の板書】

《活動内容・児童の反応》

- 集団宿泊学習の振り返りで「学んだこと」「生かしていきたいこと」をしおりに記入した。
- スライドショーをみながら、各活動の振り返りを行った。
- 「最高学年になるためには？」というねらいで学習を進めた。
- ☆ 野外協力ゲームを通して、信頼や助け合い、チャレンジすることの大切さを学んだ。難しい課題もグループの友達と協力することでクリアできた。達成感や喜びを感じることができた。
- ☆ 6年生になると求められることが多くある。→集団宿泊学習を振り返り、みんなで乗り越えていこう。そして、最高の最高学年になれるように残りの半年を頑張っていこうというまとめをした。

引率者の感想

- 事前に所員と学年部で話し合いを行うことで、集団宿泊学習についてより具体的にイメージをもつことができた。
- 事前に道徳の学習を行うことで、児童が集団宿泊学習の活動場面で、友達と意見が食い違った場合に、児童が具体的に考えることができた。
- 集団宿泊学習後に、振り返りとして学級活動を行ったことで、今後の学校生活で児童が主体的に活動できるようになった。学級・学年としてのまとまりが、より深まった。

児童の変容

- 集団宿泊学習を終えて、落ち着いて学校生活を送っている。
- 自分のことは自分でできる児童が増えた。
- 友達と意見が食い違うがあった場合に、これまでは感情的になることが多かったが、落ち着いてお互いの意見を聞く児童が増えた。
- 6年生に向けて、自分たちは、何をしないといけないのかを考えて、学校生活を送っている。

【実践事例】「悠遊学舎 わくわくキャンプ」

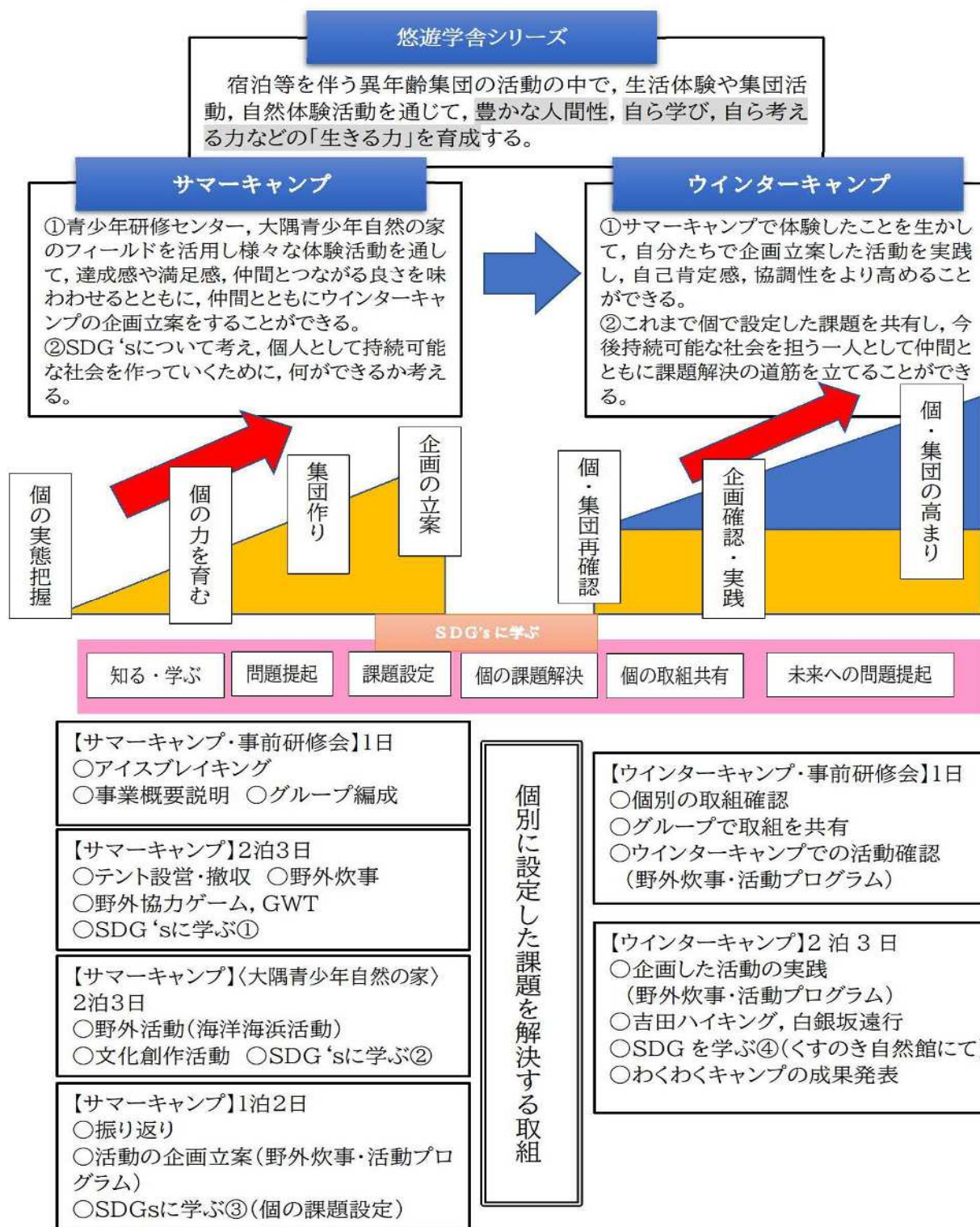
サマーキャンプ:7月23日(火)から28日(日)まで 5泊6日

ウインターキャンプ:12月25日(水)から27日(金)まで 2泊3日

〔参加者:小学5年生13人 6年生7人 中学1年生8人 2年生2人 合計30人〕

事業の構想

悠遊学舎シリーズ「わくわくキャンプ」構想について



事業の趣旨

宿泊を伴う異年齢集団の活動の中で、生活体験や集団活動、自然体験活動を通じて、達成感や満足感、仲間とつながる良さを味わわせ、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」を育成する。

事業の特色

本事業は、小学5年生から中学生までを対象にした事業である。この期の児童生徒は、5泊6日の長期にわたって親元を離れるという経験は少ないことから、テントで宿泊したり食事を自分たちで作ったりする活動は、自分自身と向き合いながら自己の成長を実感することができる機会であり、他人と協力することの大切さやよさに気づき、それを実践していこうとする態度を養っていく場にもなっている。



事業のテーマ(プロジェクト研究テーマを含む)

【「やればできる」自分】

親元を離れて長期の宿泊体験事業ということから、事業終了後に参加者が達成感や自己有用感を味わうことができるような活動プログラムを意図的に挿入した。非日常的な活動として、テント設営や野外炊事(カレーライス、バーベキュー)、文化的創作活動を取り入れ、初めて体験することで、新たにできることを増やした。また日常的な活動として、宿泊棟での活動においては、家庭では保護者が行っている活動(洗濯、寝具の準備や片付けなど)を参加者自身が行うことで、保護者への感謝や自分なりにどうしたら効率よくできるかを考えるように意識付けを行った。

【「絆」を深める】

年間を通じて、同じ参加者と共に活動することから、所属感や協調性を育むことができる活動プログラムを計画した。初期段階では、仲間をよく知ること、仲間と一緒に活動することの喜びを感じることができる活動プログラム(野外炊事やキャンプファイヤー、アクティブ大作戦など)を実施した。また、毎日就寝前の時間に、その日のテーマについて振り返り、翌日にその課題を解決できるようにした。中期から後期にかけては、参加者の相互理解ができ、より自分たちで何かをしたいという意欲が高まることから、自主性や主体性が育むために、自分たちで企画立案した活動プログラムを実践する場を設定した。

わくわくキャンプのイメージ



図1 「わくわくキャンプのイメージ」

【「自分にもできるSDGs」の取組】

参加する児童生徒は、将来持続可能な社会を担っていく存在である。そのために、事業全体を通して、持続可能な社会をつくるために自分なりにできることは何かを考え、実践することで、よりよい未来を作っていくことへの意欲・関心・態度を身につけてほしいと考えた。そこで、「自分にもできるSDGsの取組」というテーマを設定して、実践することとした。講師からの問題提起により、自分を振り返り、自らできるSDGsを考えた。海洋海浜活動や白銀坂遠行において、海岸を観察し、海洋ゴミの多さに気づき、これからの地球や身近にできるSDGsの取組を具体的に考察することができるようにした。



図2 「『自分にもできるSDGs』のイメージ」

活動の実際【サマーキャンプ】

【「やればできる」自分】

参加者の不安を払拭するために、事前研修会を実施し、アイスブレイキングや活動の具体的な内容を示した。事業時には、見通しが立っていることから、スムーズに活動に入ることができた。

非日常の活動として、1日目は、キャンプ場での活動を実施した。これまで大人の助けをもらわないとできなかったテントの組み立て[写真1]や野外炊事[写真2]での食材の準備、調理、片付けを自分たち自身の力で実践することで、その困難さを実感した。一方で、体験したことにより、自分たちの力でやり遂げた達成感を味わうとともに、次の野外炊事で気を付けるべきこと、効率的に活動するために必要なことを考えることができた。

2日目からは宿泊棟での宿泊とした。活動以外で部屋や寝具の管理[写真3]、洗濯の準備から片付けまでを実践した。1日の流れを考えた部屋の管理や快適に過ごすための寝具の準備など、時間内に行い、衣類の洗濯など、普段保護者が行っていることを自分で行った。始めは、うまくいわずに友達の力を借りる場面もあったが、徐々にコツをつかむことでできるようになった。

3日目以降、場所を大隅青少年自然の家に移しての活動とした。センターでの流れを想起することで、所員から言われるのではなく、自分たちでできるようになった。

サマーキャンプからウインターキャンプまで5か月間が空くことで、買い物や調理など自らできることを取り組むこととし、ウインターキャンプへの意欲・関心・態度を維持するようにした。



【写真1 テント設営の様子】



【写真2 野外炊事の様子】



【写真3 ベットメイキングの様子】

【参加者の感想から】

- 時間内に自分の荷物の整理をすることが難しかった。
- 友達からのヒントで、自分でもやってみようという気持ちになれた。
- それぞれの活動でコツをつかむと、自分でもできることが分かった。

【「絆」を深める】

参加者の関係を早く築くことができるように、初日からグループでの活動を取り入れた。また、夜には、振り返りの時間[写真4]を設定し、成果と課題を出し合い、翌日のめあてを決めるようにした。

初日のテント設営や野外炊事(カレーライスづくり)は、関係性が築けていないということもあり、ぎこちない雰囲気であったが、中学生が中心となり、下の学年の仲間に積極的に声かけをしたことで、徐々に表情も柔らかくなり、夜のキャンプファイヤーは、大いに盛り上がった。

2日目以降は、宿舎や食堂での過ごし方を自分たちで話し合って進めさせた。また、ゲーム性を取り入れた仲間づくりゲームを実施したことで、早く打ち解けることができた。しかし、打ち解けたことにより、冗談が過ぎたり、相手のことを考えていない言動が見られたりするようになった。その都度、お互いで話し合い、さらに、全体で情報を共有した。同じ状況になった際、どのような対応がよいのか全員で考え、共通理解した。これを繰り返すことで、常に活動を振り返り、指導者から言われるのではなく、自分たちで気づき、改善できる姿が見られた。

3日目からは、大隅青少年自然の家[写真6]での活動を行った。宿泊棟での過ごし方や野外炊事[写真5]では、これまでの活動を想起して、主体的に準備から片付けまで行うことができた。発達段階もあるが、中学生がリーダーシップを発揮し、下の学年の仲間も、相手の思いを聞く態度が育まれ、主体的に活動に取り組むことができた。

これらの活動を通して築かれた、関係性を生かして、残り2日間で、ウインターキャンプにおける活動プログラムを企画立案した。話し合いにおいては、これまでの活動を想起するとともに、季節を考慮した活動プログラムを考えるようにした。冬の野外炊事は、体が温くなる「あったか鍋作り」、文化創作活動は、事業実施が年末であることから、「正月飾り」をすることとなった。



【写真4 振り返りの時間の様子】



【写真5
経験を生かした野外炊事の様子】



【写真6 宿舎内の様子】

【参加者の感想】

- 1日目は、「もうやっていけないかも」という不安だらけで何も成長していなかった。しかし、今はみんなでいる時間が何より幸せである。
- 他の学年と仲良くできるか不安だったが、すぐに話せるようになった。
- 相手の気持ちが分かるようになった。自分たちで作ったカレーは、いつもよりおいしかった。

【「自分にもできる」SDGs】

年間を通じて、SDGsについて考えることにした。まず、参加者のSDGsの認知度をアンケートから検証し、講師と連携して講話の内容を決めた。

「SDGsという言葉は知っているが、具体的に知らない。」「学校ではSDGsの取組をあまりしていない。」という結果であったことから、基本的な概念や身近なところからできるSDGsを中心に講話[写真7]をしていただいた。参加型の研修を取り入れたことで、より実践に向けて考えやすい内容でとなった。その後は、意識を持続できるような活動プログラムを、意図的に構成した。

国立大隅青少年自然の家での海洋海浜活動では、海岸にある漂流物を拾い、分別し、漂流物の重さや種類を競うゴミリンピック[写真8]を実施した。文化創作活動として、拾った漂流物で「海の伝言板」[写真9]を制作した。サマーキャンプ後半では、ウインターキャンプまでの5か月間に自分ができるSDGsの取組を計画し、サマーキャンプ終了から実践することとした。



【写真7 講師による講話の様子】 【写真8 ゴミリンピックの様子】 【写真9 海の伝言板制作の様子】

【参加者の感想】

- 2030年までに達成しないといけないSDGsの目標があり、そのためには一人一人が意識して実践していかなければいけないことが分かった。
- ゴミリンピックでは、思った以上に漂流物があることが分かった。
- 漂流物を生かして、海の伝言板を完成させることができた。

活動の実際【ウインターキャンプ】

【「やればできる」自分】

夏から5か月空くことから、生活の中で、自分ができることを率先して取り組むことを約束した。12月上旬の事前研修会で、5か月の取組について発表し、ウインターキャンプの野外炊事や宿舎・食堂での過ごし方について、主体的に実践できるように確認した。自らの実践を振り返り、他者の実践を聞くことで「自分も他にできることがあるのではないか。」という意識が芽生え、ウインターキャンプに向けて、さらなる意欲を高めることができた。また、ウインターキャンプでは、白銀坂遠行や吉田ハイキングがあることを知らせ、体力づくりをするように周知した。

ウインターキャンプが始まり、サマーキャンプやこれまでの生活経験を生かして、自主的に生活する場面が多く見られた。宿舎での生活は、所員の指示なく自分たちで環境を整えていた。野外炊事[写真10]では、安全面に留意し、包丁や火の管理をしていた。明らかにサマーキャンプから自分たちでできることが増えていることが分かった。また、白銀坂遠行[写真11]では、当所から霧島錦江湾国立公園の海域である重富海岸まで、起伏のある10キロメートルという長い道のりを完歩することができた。白銀坂遠行、吉田ハイキング[写真12]、それぞれ、長い道のりを歩ききったことで達成感を味わうことができ、さらに「自分はやればできる。」という自信につながった。



【写真10 手際がよかった
野外炊事の様子】



【写真11 ゴール間近の白銀坂
遠行の様子】



【写真12 吉田ハイキングの様子】

【参加者の感想】

- 歩ききることができて「自分はもっとできるかも」と思えたので、自分が成長したと思う。
- 白銀坂遠行を乗り越えることができたことは、自分の成長だと思う。
- 最後までがんばる忍耐力がついた。

【「絆」を深める】

サマーキャンプの経験を生かして、参加者同士で励まし合い、協力し合って活動できるように活動プログラムを構成した。

1日目の白銀坂遠行は、個人の頑張りが一番であるが、これまで築いてきた関係を大切に、励まし合うことで、困難な道のりも乗り越えることができた。また、サマーキャンプで企画立案したオリジナルの活動プログラム「あったか鍋作り」は、1日目の夜から食材の買い出し[写真13]や調理の役割分担を行った。買い出しは、限られた予算の中で、より満足いく調理をするために、値段や大きさを見て選び、できるだけ残金がないように買い物をしていた。野外炊事[写真14]では、計画に沿って、経験を生かしながら調理を行った。企画したものが徐々に成果として表れることへの期待が、表情に表れており、とても印象的だった。準備から片付けまで、意見を出し合い協力して取り組んだことで、これまで食べた鍋料理とは格別で、満足度が高かったように思う。

季節に応じた文化創作活動、しめ飾り作り[写真15]を実施した。個人の作品作りではあるが、わらを編む作業は、一人ですることが難しく、声を掛け合って、ペアまたは3人1組になり、制作していた。気軽に声を掛け合って活動できるようになったこと、それは、サマーキャンプから築き上げてきた仲間の絆がさらに、深まった証であった。



【写真13 食材買い出しの様子】



【写真14 あったか鍋作りの様子】



【写真15 しめ飾り作りの様子】

【参加者の感想】

- 吉田ハイキングで友達との仲を深めることができ、その後のあったか鍋作りでは、サマーキャンプよりもたくさん作業ができて、自分の成長を感じることができた。
- 3人でしめ飾りを編むときに協力するとすごくうまくいくことが分かった。
- 予想以上に満足のいく「あったか鍋」を作ることができた。

【「自分にできる」SDGs】

サマーキャンプから5か月間、自分でできるSDGsの取組を実践し、ウインターキャンプで、お互いの実践を共有、年間のまとめを行った。サマーキャンプでお世話になった講師との交流[写真16]を設定し、自分たちで実践したSDGsの取組を講師に伝えた。また、今後できるSDGsについて考えられるように、重富海岸での研修を行った。海洋ゴミの中にあるマイクロプラスチックが今後、海洋環境汚染に重大な影響を与えることを教えていただき、プラスチックの扱いについてどうしていくことがよいのかを考えた。化石燃料を原料としていることから、製造を減少させることやリサイクルすることで、マイクロプラスチックを削減する案が出された。自身が取り組めることとして、マイ水筒の利用やペットボトル飲料の購入を減らしたり、ゴミの分別をより細かくしたりすることが出された。

年間を通して考えたり、実践したりしたことで、知識だけでなく、環境問題に携わっている方との交流や漂着物の収集等[写真17・18]を通して、持続可能な社会を作っていくためには地球環境を守っていくこと、何より一人一人がSDGsの取組を実践することの大切さを感じることができた。



【写真 18 フォトフレーム作りの様子】

【参加者の感想】

- SDGsの実践を自分なりに1年間を通じて、実践することができた。
- 浜本麦さんの話を聞いて、マイクロプラスチックについて知ることができた。
- きれいな重富海岸を実際に歩いてみたが、マイクロプラスチックが思ったより多く漂着していた。

自分にもできるSDGsの取組～まとめ～

「悠遊学舎わくわくキャンプ～SDGsの取組～」

【これまでの自分】

名前 〇〇山 〇〇

食べ物を残してしまった。

年少組マン

☆わたしができる「SDGs」宣言☆

食べ物を残さずにいじり、しっかりと最後まで食べる。

【自分が取り組んだ「SDGs」の実践(絵)】

のこしてはった時

すべて食べ終わるまで

【実際に取り組んだ感想】

最初は、さん食が苦しかった。SDGsのことをして、さん食をすることは、よくないと思って、おたは。なんとなんとかおたはに食べはったのになんとも思わなかった。食生活も

【次に取り組むSDGs】

お水を大切にしよう

「悠遊学舎わくわくキャンプ～SDGsの取組～」

名前(氏) 悠志

SDGsの取組

ECONOMIC GOALS

☆わたしができる「SDGs」宣言☆

消費を減らし、エネルギーの無駄遣いをしなく、資源(水・紙・ゴミ等)の無駄使いをしない!

【実際に取り組んだ「SDGs」の実践(絵)】

【実際に取り組んだ感想】

ゴミの量を減らすことができた。

【次に取り組むSDGs】

ゴミ拾いなどのボランティア活動に参加する。

事業アンケートから

☆ この事業に参加したきっかけは何ですか。	
保護者（父母など）にすすめられた。	8
自分で決めた。	20
その他（姉が参加していたから）	1

■ 自分で決めた 20 ■ 保護者にすすめられた 8 ■ その他 1

《参加者アンケート》

☆ 自分の中で「変わったかも」「成長したかも」と感じたこと、これから、どのようなことを意識していきたいか。

- これまでは不安だった自分だったが、キャンプを乗り越えてちょっと変わった。
- 冬にやった白銀坂遠行でおよそ10キロメートル歩ききることができたことで、「やればできるかも」と思った。友達を増やして仲良くなることができた。
- これまでの私はあまり「やってみよう」と思ったことがなかったけれど、歩ききることができて「自分はもっとできるかも」と思えたので、自分が成長したと思う。
- わくわくキャンプを通して、時間の管理ができるようになり、周りの友達に気配りをするようになった。相手の様子を見て冗談を言ったりやめたりすることできるようになった。
- 野外炊事をたくさん経験し、自分の積極性が高まり、料理もスムーズにできるようになって成長を感じることができた。
- 最後までがんばる忍耐力がついた。

《保護者アンケート》

☆ 本事業に参加させて、変化したことや良かったと思われたこと。

- わくわくキャンプに参加して、自分に自信がついたようで学校も楽しく行けるようになった。学校の先生方も「変わりました。」と言っていた。
- 係を遂行したい気持ちと仲間との関係を円滑に進める為、グッと我慢した場面があった。そのように俯瞰しながら自分を認識する力が付いたように感じる。そして、目的を果たすために準備（身体、心、備品）が必要だと認識が高まった。
- 自分が少し躊躇することへの挑戦、チャレンジする気持ちが明らかに出てきた。
- 異なる個性や能力をもつ子供たちが協力し、共通の目標を達成する過程で、時に意見が食い違いながらも互いの意見を尊重し、それぞれの役割をもちながら、課題を克服していくことを学んだ。息子は感情をコントロールすることの重要性を学んだようである。本活動での成功体験で、息子の自己効力感が高まった。



7割の参加者は、自ら本事業に応募している。事業に対する意欲が高いことから、各活動に積極的に取り組んでいた。また、人間関係づくりも積極的に声を掛け合う雰囲気があり、良好な関係を築き、保つことができた。サマーキャンプは、猛暑、ウインターキャンプは、厳寒での活動となったが、各自ねらいを達成するために弱い心に打ち勝つことができた。また、辛い場面でも励まし合うことで、長い距離を歩くという困難を乗り越えることができた。保護者から勧められた参加者も事業終了後には、次年度も本事業に参加したいという声が聞かれた。

保護者アンケートからは、参加したことで、自立してきたという意見が多数あった。どこか人任せであった我が子が、自ら進んで手伝いや学習に取り組むようになったようである。また、友達関係についても自己中心ではなく、相手の気持ちをよく聞く姿勢が見られるようになった。

長期の宿泊を伴う事業は、一番に参加者同士の絆づくりが大切で、さらに絆を深めるためには、日々振り返りを行い、成果と課題から、翌日のめあてを立て、参加者と所員で共有することを繰り返すことである。

Ⅳ 研究の成果と課題

【成果】

〔仮説1〕

- これまで、IKR調査は、事前調査と事後調査までとしていたが、追跡調査まで実施した。その結果、集団宿泊学習以降も、「心理的社会的能力」や「徳育的能力」といった調査項目では、自己肯定感や適応行動の数値が向上するなど、子供たちの意識・意欲の維持向上を図ることができたと分かった。よって、当所に限らず、県内の青少年社会教育施設所員は、どのような活動プログラムが子供の実態や成長に必要ななどについて、学校との連携を密にして取り組んでいくことが重要であると考ええる。
- 具体的には、教科等と関連付けた活動プログラム（指導案）のねらいや活動方法等について、共通理解を図るなど、学校ごとの担当所員が一貫した指導や支援を計画的・効果的に行うことで、子供の「生きる力」の向上につながることが期待される。そのため、今後についても、希望する学校に対し、積極的に連携を図っていきたいと考える。

〔仮説2〕

- 3つのテーマを設定して、体験活動プログラムを組み立て事業展開した結果、個人の基本的な生活習慣・参加者同士のコミュニティを確立することが、とても重要であることが分かった。次年度サマーキャンプは、その基礎を身に付けるためにも当センターの既存の活動プログラムを中心に組み立て、所外活動に生かしたい。またウインターキャンプに向けて、参加者自身でプログラムを企画立案させたい。
- テント設営や野外炊事、アクティブ大作戦など、既存の活動プログラムを実施するだけでなく、ウインターキャンプでオリジナルメニューづくりを取り入れた結果、協調性だけでなく、プログラムの全過程に関わることで主体性を育むことができたため、今後も継続していきたい。

【課題】

〔仮説1〕

- 教科等と関連付けた活動プログラム（指導案）が、「何のために学ぶのか」という学ぶ意義を共有した活動内容となっているか、また、子供一人一人の主体的な体験活動となっているかという点から見直しを図る必要がある。
- IKR 調査結果と、全国学力・学習状況調査や鹿児島学力・学習状況調査結果との比較ができると、より体験活動を通した「生きる力」の向上についての分析が生きてくると考えられるため、調査方法の見直しを図る必要がある。

〔仮説2〕

- ねらいに即した活動プログラムを組み立てたが、気象状況によって体調を崩すことがあった。昨今の気候を考慮し、安心で安全な事業運営を担保しながら、ねらいに即した活動プログラムの組み立てが必要である。

おわりに

令和2年度から本研究テーマに基づく調査研究を推進して参りましたが、集団宿泊学習、主催事業にて、体験活動を通した「生きる力」の変容を検証するために多くの御協力をいただきました。

本年度は、本研究のまとめとして、教科と関連付けた活動プログラム(指導案)を活用した調査研究を推進するにあたり、鹿児島市立南方小学校、玉江小学校、西伊敷小学校、姶良市立帖佐小学校に多大なる御協力いただきましたことに深く感謝申し上げます。

これまでの成果や課題を、今後の事業推進に生かすとともに、所員一同研鑽を重ねて参ります。

〈参考資料〉

※ 独立行政法人 国立青少年教育振興機構「集団宿泊学習の教育効果」

URL:https://www.niye.go.jp/pdf/supportguide2103_A4.pdf

※ 国立教育政策研究所「令和6年度全国学力・学習状況調査の結果」

URL:<https://www.nier.go.jp/24chousakekkahoukoku/index.html>

※ 鹿児島県教育委員会「令和5年度鹿児島学習定着度調査結果報告」

URL:<https://www.pref.kagoshima.jp/kyoiku-bunka/kyoiku/index.html>



研究同人

所長 当房 孝子 次長兼総務課長 脇野 幸一 研修課長 村川 勝博

【総務課】

主幹兼

総務係長 柳田 昌紀

主 査 有川 剛弘

主 事 児玉 華奈子

旧 同 人 林 直樹

【研修課】

主 任

研修主事

社会教育
指導員

中西 翼

當房 秀之

稲田 浩二

桜井 万里

西留 栄俊

長野 一成

大下本 洋平

東 泰宏

仲谷 仁美

片野田 隆紀

